

# 日本列島 病院探訪

全国の特徴ある  
病院を取材する  
“フォルテ”



# “FORTE”

特定医療法人 一輝会

## 荻原記念病院

Ogihara Memorial Hospital

「治し、支える」医療を追求し、  
神戸屈指のリハビリ病院を目指す

Interview: ドクターズマガジン編集部 Text: 田口素行 Photograph: 太田未来子



理事長・院長  
**荻原 徹**  
Toru Ogihara

# 和

荻原記念病院を  
漢字一文字で表すと

多職種連携には「和」が大切です。一人一人それぞれの持つ力をワンチームで結集し、多職種で和をもって、患者さんへ医療を提供できる病院でありたいです。

2 023年4月、特定医療法人一輝会が経営する神戸市内有数の回復期リハビリテーション病院である「荻原みさき病院」と、神戸市中央区で整形外科領域の地域医療を支えてきた「荻原整形外科病院」が統合し、「荻原記念病院」として新たな船出を切った。

高齢化が加速する日本では、「治す」だけでなく、「支える」医療も求められている。一輝会では、急性期病棟、地域包括ケア病床、回復期リハビリテーション病棟・医療療養病棟、訪問事業を展開し、「治し、支える」医療を追求し続けてきた。その結晶でもある神戸市長田区に誕生した「荻原記念病院」は、人々がいつまでも安心して暮らせる街づくり、そして高齢化が進む日

		2		1
6		3	4	
10	8	7		5
	9			

1. 病院外観 2. 園芸療法士 3.4. 園芸療法の一環で行う植花活動や野菜の栽培 5. 理事長・院長の荻原徹氏 6. リハビリチーム集合写真 7. リハビリの様子 8. リハビリテーション室 9. 病棟の様子 (右: 脳神経内科医の辻佑木生氏) 10. 庭園での屋外リハビリ



神戸市長田区に新たなランド  
マークが誕生した。一輝会の「荻  
原さき病院」と「荻原整形外科  
病院」が統合し、2023年4月  
に移転開設した「荻原記念病院」  
（回復期リハ90床・療養52床）だ。  
その外観はまるで洗練された  
マンションのようで、一般的な  
病院イメージとは異なる。それ  
もそのはず。「荻原記念病院」は  
神戸市初となる病院と分譲マ  
ンションとが一体化した複合

# 1

## 【病院×住居】の画期的な複合施設 リハビリを核に人々の生活を支える



本社会の未来を支えるロールモ  
デルとしても注目されている。  
荻原徹院長への取材から、徹  
底した患者ファーストの精神で  
人々の生活を支える「荻原記念  
病院」の取り組みとその強さに  
迫った。



施設【ASMACHER神戸新長田】

として誕生。全80戸のマンションは、各住居と病院が直接インテグレーションでつながる「ヘルスケアサポート」をはじめ、小児科・産婦人科・婦人科に特化した24時間対応の「オンライン医療相談サポート」など、あらゆる世代が豊かで健康に過ごせる

「ASMACHERウェルネスサポート」が付加価値として高く評価され、早期完売となった。マンション専用玄関に隣接する病院入口を入り、廊下を20mほど進むと右手にリハビリテーション室が見える。取材陣が顔を出すと、スタッフたちの気持ちのいい挨拶と笑顔が迎えてくれた。大きな窓から外光が差し込む明るく広い空間の中で、リ

ハビリテーションに取り組み患者とスタッフの姿が生き生きと輝いている。2階にある病院受付に行くには、動線上リハビリテーション室の前を必ず通ることになり、その光景は病院を訪れる人々の目に強く刻まれる。院長の荻原徹氏は自信のある力強い声で言う。

「当院は神戸屈指のリハビリテーション病院を目指しています」リハビリテーションは同院の強みであり、核となる医療だ。統合前の「荻原みさき病院」では、1985年の開設当時から、神戸屈指のリハビリテーション病院を目指して365日のリハビリテーションを提供し、市外から患者が集まるほど厚い信頼を得ていた。この目標は新病院にも引き継がれ、高い専門性はもちろん独自の創造性をもってさらなる質の高い医療サービスを目指す。

スタッフ体制はPT41人、OT26人、ST9人(2023年6月現在)と充実しており、脳疾患では当たり前に行われている早期リハビリテーションを整形外科領域でも積極的に実施している。「高水準のリハビリを提供するのは大前提。当院では園芸療法や、失語症コーラスグループの活動をはじめとした音楽療法

を行うなど、独自性のある取り組みも積極的に行っており、スタッフからの提案でセラピードッグの導入も検討中です」

園芸療法士が在籍する病院は非常に珍しい。地域住民にも開放されている敷地内の庭園広場では植花活動や野菜の栽培といった園芸療法が行われ、患者から好評を得ている。さらに庭園広場には一昔前の日本家屋にあるような急階段など2種類の階段、傾斜道が設置されており、応用リハビリテーションにも活用されている。庭園広場からは一般の方々もリハビリテーション室の様子を見ることができ、その活気ある光景に触発され「いつか私もここでリハビリがしたい」と住民からも好評である。

また、同院の病棟は回廊型になっていて、特徴で、一周約80mの廊下は幅も広く、多くの入院患者がリハビリテーションの自主訓練に励んでいる。「当院では長期入院になることが多い療養病床の患者さん自宅復帰を目指してリハビリに取り組んでいます。改善度や在宅復帰率は全国平均よりも高く、当院なら安心して任せられると紹介患者さんも多い。入院率は通年で95%を目指しています」



## 2

### 充実したスタッフと強い組織で安心と信頼の医療を支える

他の回復期や慢性期病院で断られるような重症、難病、廃用症候群、精神疾患、認知症の患者も受け入れており、さらにCOVID-19による後遺症への対応や、コロナ禍であっても入院患者と家族の面会を積極的に実施してきた。

「良い病院とは、自分も家族も診てもらいたい、入院したいと思える患者ファーストの病院です。当院は患者さんが家に帰ることをサポートする場所。ご家族と患者さんが対面できないまま自宅復帰を目指すのはお互いにとって大きな不安であり、定期的に面会できることはとても重要だと考えます」

患者ファーストの姿勢は荻原氏の仕事着にも表れている。

「院長が白衣を着ていると患者さんとの間にどうしても上下関係が生まれてしまう。だから私は一年中ポロシャツタイプのユニフォームを着ているんです」と、荻原氏は微笑む。

安心と信頼は地域の医療機関からも絶大だ。患者の半数以上は医療機関からの紹介であり、診療実績に対する評価はもちろん、荻原氏が直接、地域の医療機関に足を運んで関係を培ってきたことも大きい。



「紹介患者さんのその後の経緯をしっかりとフィードバックしていることも、信頼を得ている一つの要因だと思います」

そして同院の安心と信頼の医療を支えているのが、多くの優れた専門スタッフだ。同院では医師優位のヒエラルキーはなく、多職種がお互いを専門職として尊重し、連携・補完し合うことで患者満足度の高い医療を提供している。通常、ケアワーカーは看護部の傘下だが、同院では全国でも珍しい看護部と同等の独立組織としてケアワーカー部がある。また、コロナ禍での対応で看護部の病棟業務が回らなくなったときは、リハビリテーション部が率先して看護業務をサポートするなど、職種の垣根を越えて対応した。このことは異なる職種の仕事について身をもって知る機会にもなり、さらなる連携強化にもつながっている。

「当院では職種ごとの縦割り組織ではなく、横串による複数組織の一元化を目指した体制づくりなど、マトリックス組織の導入にも注力しています。もちろん質の高い医療の提供には教育も重要。2022年には教育委員会を立ち上げ、教育体制の強化も図っているところです」

「あなたの未来に笑顔を届ける存在となる」

この言葉は同院が掲げているパーパス(存在意義)だ。少子高齢化が加速し、将来への不安が高まっている日本社会において、いつまでも安心して笑顔のある生活を送れることは大きな課題である。患者だけではなく人々の生活にも安心と笑顔を届けるように、地域に開かれた、顔の見える病院として、医療と地域住民をつなぐ取り組みにも尽力している。

「荻原みさき病院では屋台を出したり、バザーや祭りを開催したりと多くの交流イベントを行ってきました。新しい病院でもリハビリテーション室でのコ



### 人々の健康を支え、笑顔が生まれる街づくりを目指して

ンサートなどさまざまな企画を考え、地域との交流を育みながら、人々の健康な生活を支え、笑顔が生まれる街づくりに貢献していきます」

人々が安心して笑顔で暮らせる街づくりにも取り組む。地域住民にとって同院が身近な存在になることは、未来にわたって大きな安心を担保してくれる心強い存在だろう。

「患者さんが再入院されると、『ただいま』って言われるんです。自分の家や家族のように身近な

存在に思ってくれていることが嬉しいですね」と、荻原氏から優しい笑みがこぼれる。

リハビリテーションによって、できなかったことができるようになる喜び。退院が決まり自宅復帰に喜ぶ患者と家族。「荻原記念病院」では日々たくさん笑顔が生まれている。それは医師やスタッフたちにとっても大きな喜びであり、仕事への力強い原動力になって、人々の健康と笑顔ある生活を未来に紡いでゆく。



## ■ 脳神経内科

### 地域社会のニーズや医療情勢の変化にも柔軟に対応できる病院です

辻 佑木生 Yukio Tsuji



脳神経内科は常勤医3人と、病院規模に対して非常に充実した診療体制をとっています。当院は認知症健診の指定施設であり、脳神経内科では物忘れ外来やリハビリテーション患者の全身管理を行っています。また、若手の非常勤医師に対する脳神経内科の専門的教育やスタッフ教育にも取り組んでいます。

脳血管疾患の紹介患者は年々増加しており、2022年度の脳血管疾患におけるリハビリ患者の割合は全体の34%。脳血管疾患のFIM評価法によるリハビリ成績は、全国平均23に対して2021年度は23.8と平均を上回り、2022年度は34と突出した成績を収めています。また、新たな治療として2023年から痙縮に対するボツリヌス療法も始める予定です。

リハビリテーションは、患者さんの身体機能だけではなく、患者さんやご家族の価値観、希望、気持ちに寄り添った治療が必要です。そのためには多職種や各部署との緊密な連携によるチームアプローチが重要となります。当院は多職種、各部署の意見交換も活発で結束力も強く、縦割りではない柔軟な組織風土が特徴。一人一人に最適なりハビリテーションを組織横断的なワンチームで提供しています。高齢化が進む地域社会のニーズや、日本の医療情勢の変化にも柔軟に対応することができる組織です。さらに毎週、医師が集まってドクターミーティングを開催し、現状業務の課題や疑問点をみんなで共有しながら業務改善に取り組むなど、「働きやすさ」においても優れた病院であると感じています。